

1. 浜松市博物館テーマ展「家康伝承と浜松」

- ・浜松地域に残る徳川家康にまつわる「家康伝承」に焦点をあてた展示
- ・史実とは伝承を分けて考える
- ・なぜ伝承が形成されたのか
- ・そもそも浜松城在城期の徳川家康にまつわる史料が少ない

2. 家康伝承調査事業について

- ・有志の市民の方と協働で徳川家康にまつわる「家康伝承」を調査
※令和2年11月～令和4年9月
- ・職員を講師とした学習会や見学会を行った上で調査を行った。
- ・出版物に記載された「家康伝承」を収集した。
- ・現代の市民がもつ「家康」イメージの調査
- ・『家康伝承調査事業成果報告冊子 家康伝承と浜松』を刊行

3. 「家康伝承」をどうとらえるか

○「伝承」であること一歴史的事実とは別物。一方で歴史的事実とあわせて語られることが多い。伝承から史実を導き出すことは危うい。伝承が語られてきた歴史的事実から歴史を描き出すことはできる。

○誰が物語を作ったのか

現在私たちが知っている「家康伝承」は、「物語調」の話。

→物語として整理・脚色をした人々がいる。

代表的人物として御手洗清が挙げられる（著書として『遠州伝説集』（昭和42）・『家康の愉快的伝説一〇一話』（昭和58）などがある。）。

一大正の終わりから昭和の初めにかけての郷土誌のなかで伝承が調査収集された流れがあった。—「郷土愛」の涵養 失われつつある郷土の伝統の保存【史料1・2】

※物語の内容については、記述する人により異なっている。

郷土誌による調査は口承の聞き取りや二次資料等を基にしている。

◎伝承をどのように整理するか

- ・『家康伝承調査事業成果報告冊子 家康伝承と浜松』では、庶民に助けられた家康、家康が与えた褒美（名字・特権）、三方ヶ原の戦いにまつわるもの、城と国境をめぐる攻防、築山御前・信康に関わるものという分け方をしている。
- ・特に逃げてきた家康を庶民が助け、褒美を与えられるという構造のものが多い。田の草

取・妙恩寺・俵端・目通り八町、桶屋等。他名字にまつわるもの（白尾・曾布川・御手洗等）。

- ・家康に従っていた由緒を持つ家の話、家康の家臣の話もある。
- ・それらの伝承のもととは何か？特定は困難。ただし、次項でとりあげるものは発生のもとを探る手がかりの一つである。他には芸能を通した流布も考えられる。

4. 近世における家康にまつわる伝承

- ・由緒書（主に 19 世紀に多く作られる。自らの家や集団がどのような由緒をもっているかを主張。負担軽減や恩恵を得るための根拠として。）
 - ・歴史書（江戸幕府創業の歴史を記述）
 - ・家譜（自分の家が江戸幕府創業にどれだけ貢献したか、家康との関わりがあるか）
- ☆書かれている史料の性格（いつ書かれたのか、誰がどういう目的で書いたのか）を踏まえて解釈を行う。

○浜松地域に残る家康にまつわる由緒その 1—光明勝栗【史料 3】

- ・山東・只来村の百姓が徳川家康に搗栗を献上したところ、家康は喜び光明勝栗と名付けた。以来将軍家へ勝栗を献上してきた。という話。
- ・光明勝栗作りは明治期にとだえる。しかし、近年光明勝栗保存会により復活した。

○浜松地域に残る家康にまつわる由緒その 2—肴町の由緒

- ・肴町の由緒が複数残されているが、記載内容が各々異なる。【史料 4・5】
- ・もといた場所（榎御門近辺・本魚町）
- ・現在の肴町に移転してきた時期（徳川家康在城期・堀尾吉晴在城期）
- ・家中の屋敷地を肴町にしたのか、家中の屋敷にするために移転をしたのか。

☆浜松宿の伝馬役負担や肴商売の独占等に関わり由緒が述べられている。

近世の由緒書段階でも確定的な内容は分からなくなっている。

○堀川城での戦いはどのように伝えられてきたか【史料 6】

- ・徳川家康の遠江侵攻の際、今川方として山村・竹田・尾藤・齋藤等を中心に気賀の人々が堀川城に籠るも、永禄 12 年（1569）3 月に落城。捕らえられた人々の首が晒された（獄門噺）と伝わる。
- ・気賀に「獄門噺」の石碑が建てられている。「堀川城将士最期之址」の記載。昭和 11 年 3 月 10 日建立。
※石碑の裏面には「永禄十一年三月十日落城同年九月九日最期」の記載がある。永禄 11 年は永禄 12 年と見た方がよい。ここでは、石碑に記された内容も批判的に見た方がよいという事例として紹介。
- ・慰霊祭が毎年実施されている（「堀川城戦士顕彰会」）。

5. 浜松八幡宮

- ・家康の敗走にまつわる「雲立の楠」がある。(敗走中の徳川家康は浜松八幡宮の洞に隠れて神に祈っていると楠から瑞雲がたちのぼり馬に跨った神霊が浜松城の方へ飛び去った。)
- ・雲立の楠—『曳駒拾遺』(正徳3年(1713)に成立。浜松城城下の諏訪社神職杉浦国頭によって書かれた浜松地域の地誌)では「駒形楠」として登場。ただし、この楠は元禄のころに風雨により折れて、現在(『曳駒拾遺』が書かれたころ)若芽が出ているとされている。
- ・浜松八幡宮の楠には源義家が東国に下る際、浜松八幡宮に参詣し、境内の楠の下に旗を建て、武運長久を祈願したという話もある。
- ・浜松八幡宮の社殿造営完成を記念して昭和5年(1930)4月に作られた「八幡宮社殿御造営に際して」という冊子には、御旗楠の上から瑞雲が立ち上り、神霊が白馬に跨り玉の大木に上り浜松城の方向へ飛び去って行ったという話が記されている。そして、玉の大木には馬蹄が残っていたため、「馬蹄の玉木」と称され、御旗楠は雲立楠と称されるようになったとされる。
- ・雲立の楠のかたわらには「東照宮御由緒雲立楠」という石碑がある。浜松八幡宮の氏子の中心的存在である板屋町の氏子により建てられている。
- ・以前の雲立の楠の根本のまわりには玉垣があった。板屋町の氏子等地域の崇敬者の名前が記されているが、「旧幕臣」の名前も見られる。近代において徳川家康とのつながりを認識させる記念物ともいえる。
- ・境内摂社として東照宮がある。社伝によれば正徳4年(1714)創建。
- ・東照宮の前に「[] (明治カ)十六年雲立楠碑玉垣新(以下埋没で判読不能)」と書かれた石碑がある。

6. 「徳川家康三方ヶ原戦役画像」について

- ・いわゆる「しかみ像」—三方ヶ原の戦いに負けた徳川家康が、戒めのために自らの姿を描かせたものといわれてきた。
- ・元徳川美術館学芸員の原史彦氏の研究で三方ヶ原の戦いとは関係のない像だということが論証された(原史彦「徳川家康三方ヶ原戦役画像の謎」『金鯢叢書』第43輯、2016)。
- ・尾張徳川家の徳川義親等によって近代になり話が作られていった。

7. 再度浜松市博物館テーマ展「家康伝承と浜松」について

- ・徳川十六将図—描かれた方は様々。後世に江戸幕府創業の功労者を神格化家康にまつわる由緒書
- ・明治期に描かれた錦絵・組み上げ燈籠—三方ヶ原の戦いを素材としたもの
=ビジュアルイメージ
- ・三方ヶ原の戦いに至る武田軍の進軍ルートについて近年新説が出されている
→一次史料をもとにした立論。
- ・三方ヶ原の戦いの布陣図—戦いの中身については確実に歴史的事実として確定するのは

困難である。布陣図は後世に作られたもの。

8. むすび

・浜松地域に家康伝承が残されてきたことをどう考えるか。

—徳川家康という人物を手がかりに近世・近代を生きてきた人々の生活や考え方、そして社会のあり方を知る。

◎どの視点で徳川家康をはじめとした歴史をみているのか。伝承ゆかりの子孫、ゆかりの地の住人、徳川家康に何らかの思い入れがある人等。徳川家康以外の人物をどう見るのか。また逆に徳川家康に敵対した人の歴史の見つめ方はどのようなものか。どちらにも思い入れのない立場の人の歴史意識はどのように形成されるのか（歴史を伝えるメディアの存在）。

・「家康伝承」を残してきた人々がいたから現在私たちが「家康伝承」を知ることができる。—古文書・石碑・口承等

・イメージが先行しやすい人物・話題であるが、史実と伝承は分けて考える。

◎地域に残る歴史情報をどう見出だし、継承するか。

・一つの手がかりは古文書。家や村の歴史を垣間見ることができる（書面の世界）。⇔口頭の世界

・近年の社会情勢において継承は困難なものも多い。災害・高齢化・空き家等。

・放置をしていけば後の世代は地域の歴史とは切り離されてしまう。